

慢性呼吸不全に対するハイフローセラピー ～新たな治療オプションとなりうるか～

神戸市立医療センター中央市民病院 呼吸器内科

永田 一真

ハイフローセラピーは近年登場した新しい呼吸管理方法で、院内での使用は全国で急速に広まっている。その主な適応は換気障害を伴わない(I型)急性呼吸不全で、疾患としては細菌性肺炎やARDS、間質性肺炎などが挙げられる。

しかしハイフローセラピーは生理学的効果として、鼻咽頭の死腔のウォッシュアウト、吸気抵抗の低下、PEEP効果などがあることが知られており、これらの効果からは換気障害を伴う(II型)呼吸不全にも有効である可能性が考えられる。実際に安定期COPDにハイフローセラピーを用いることにより、QOLやPaCO₂、呼吸数の改善やCOPD増悪の頻度の低下がいくつかの研究で示唆されている。慢性II型呼吸不全に対するハイフローセラピーの有用性は大いに期待されるところであり、現在有効性の検証のため、国内で多施設共同研究を行っているところである。

また一般にはNPPVが慢性II型呼吸不全に対して有効な治療とされているが、NPPVは患者の受け入れや介護体制の問題などにより実施が困難な場合も多い。

そういった患者においてもハイフローセラピーは快適性や簡便性により期待されるところであるが、現時点でハイフローセラピーを在宅で行うことには保険や機器管理の問題などさまざまな障壁がある。

ハイフローセラピーの有効性やそのエビデンスを示しながら、慢性呼吸不全に対する新たな治療オプションとなりうるのかについて論じたい。